

## 【全国唯研の先達に聞く】

## 尾関周二氏インタビュー

日時：2019年12月2日（2020年7月修正）

インタビュアー：水野邦彦・大倉茂

## 尾関周二氏略歴

1947年、岐阜県に生まれる。岐阜高等学校を経て1965年に京都大学文学部入学、1969年同哲学科卒業。1974年、同大学院文学研究科哲学専攻満期退学。1977年、戸坂潤賞を受賞。1978年より2012年まで東京農工大学勤務。1999年、一橋大学より社会学博士の学位を授与される。唯物論研究協会委員長、日本哲学会事務局長・評議員・理事、環境思想・教育研究会会長、共生社会システム学会会長、総合人間学会会長を歴任。

著書（単著）に、『言語と人間』（大月書店、1983年）、『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』（大月書店、1989年）、『遊びと生活の哲学』（大月書店、1992年）、『現代コミュニケーションと共生・共同』（青木書店、1995年）、『環境と情報の人間学』（青木書店、2000年）、『増補改訂版 言語的コミュニケーションと労働の弁証法』（大月書店、2002年）、『環境思想と人間学の革新』（青木書店、2007年）、『多元的共生社会が未来を開く』（農林統計出版、2015年）がある。

- 今日尾関さんご自身の研究の歩みと全国唯研とのかかわり、尾関さんがお考えになる全国唯研の持ち味などをお話しいただき、全国唯研のひとつの記録として残したいと思えます。まずは学生・院生時代のことからお話しくいただけますか。

1965年に京都大学の教養部に入って間もなく同じドイツ語クラスの種村完司さん、木下康光さん、大橋良介さんらと一緒に読書会をおこなった思い出があります。最初は西田幾多郎『善の研究』、つ

ぎに、そのころ話題になっていたマルクス『経哲草稿』を読みました。いくつかの本を順番に読んでゆきましたが、私としては早い段階で『経哲草稿』を輪読で読んだことでかなり大きな影響を受けました。

大学入学は東京オリンピックの翌年でしたが、間もなく紛争が始まり、そのあと1968年に向けて紛争が展開してゆき、大学院を出るときにもまだくすぶっている状態でした。1968年に向けた直接の動きは1967年ぐらいからでしょうが、学生運動はそれ以前から活潑で、大学入学当初からクラスにさまざまなセクトがやってきてアジを飛ばしており、学生の関心もかなり高かったですね。私や種村さんはクラスの自治委員をやっていました。

ただ私の場合は学生運動にもかかわりながら、種村さんに誘われてセツルメントの「底辺問題研究会」でも活動しました。京大にはサークルの部屋として、ボックスと呼ばれていた6畳から8畳ほどの狭い部屋が長屋のように並んでありましたが、底辺問題研究会は京大唯物論研究会と同じボックスだったので、私たち底辺問題研究会のメンバーと、向井俊彦さんから京大唯研のメンバーとは接触する機会が多かったのです。

京都の駅裏は、いまではすっかりきれいな地区になっていますが、このあたりの「東9条のセツルメント」に私たちはかかわりました。これは京都の大学全体にまたがる集まりで、京大の底辺問題研究会、立命館大学、同志社大学や京都女子大学のセツルメントなどが参加していました。子ども会が中心でしたが、私はどちらかというと子どもより青年のほうがつきあいやすかったので、地域の青年たちの「青春教室」と呼ばれる学習会に関心を持ち、そこで義務教育を十分に受けられな

かった彼らに漢字をはじめ簡単なことを教える活動に携わりました。このころ私はマルクスの『ドイツ・イデオロギー』などを読んでいて、「存在は意識を規定する」、つまり、どういう生活をしているか、どういう経済状態であるかがわれわれの意識を規定するということが、すごくよくわかりました。とりわけ、私をふくむ学生の意識と、スラムで生まれ育ったような青年との意識の違いに、目を開かされました。また、その地域で大火事が起こったとき、あるリーダー的な青年が他の青年たちを引き連れ、補償を求めて市役所に乗りこんだのですが、そこに私もついていったことがあります。地域で一か月ほどリーダー格の青年と暮らしたことも含め、いろいろな経験をさせてもらいましたね。彼をはじめ土方をしていた青年達は自分たちを「地球の彫刻師」と呼んで誇りをもっていました。私は一方でマルクスなどから学ぶとともに、他方では、当時まだ残っていたスラム・部落・朝鮮人集落などの現実の悲惨な状態と青年の明るさから学ぶという、ある種の社会勉強をしました。

そのようなわけで、大学の自治会だけでなくセツルメントに携わっていたことが、よい経験になりました。

● **学生運動はやはりかなり昂揚していたのですか。**

学生運動がいちばん激しかったのは私が修士課程のころでした。京大院生協議会（京院協）という組織にはほとんどの院生が入っていて、2000人から3000人ぐらいのけっこう強力な組織だったように思います。京院協というのは、各研究科の院協から代表者が集まってくるところで、各院協を全体として統括する組織です。なかでも法学・経済・工学の院協が非常に強かったですね。私の妻は教育学部から来ていて、たまたま原水禁の活動で知り合いました。私は博士課程に入ったときに京院協の事務局長になり、しばらくして結婚しました。当時の大学院には早いこと結婚する風潮があったのです。理系とちがって文系、とくに文

学部には種々の政治的集団が混在しており、文学研究科院生協議会（文院協）は弱小でしたが、種村さんはこの文院協の議長でした。文院協から京院協に出ていったのはなぜか私ひとりでした。

工学部の原子力の研究室から京院協に来ていた人たちが、元気でなかなかよかったです。当時は原子力の平和利用を左翼でも積極的に進める意見が大勢でした。工学部の人は技術者なので、文学部の高等遊民のような院生とちがいが（笑）、労働者的でしたね。朝はやくから夕方まで仕事をする労働者のようなスタイルでした。農学部から出てきていたのは鈴木敏正さん（現在、札幌唯研会長）でしたが、農学部は文学部同様にあまり組織が厚くなかったようで、鈴木さんばかりがよく出てきました。いま顔を覚えているのは鈴木さんぐらいです。

京院協のことは私にとってよい経験でしたが、危険な目にも遭いました。私が修士で京院協の事務局次長であったときに、同志社大学など京大以外のところから多数の「外人部隊」がゲバ棒をもって来たものです。京院協のボックスは10畳以上ある広い二部屋を持った平屋の一軒家で、大学の西はずれの西部講堂地域の構内にあり、大学本部の構内からは離れていました。たいてい夜はみなそのボックスで寝泊まりしており、あるとき私もボックスで寝ていたら、そこに外人部隊が押し寄せてきたことがあります。院生協議会というのは学部学生の自治会とは違うので、外人部隊にとって対立する敵でなく中立的な存在と思われていたようで、その外人部隊が院協のボックスに入ってきたときは「大学院生の方ですか」と最初はいねいな言いかたをしていたのですが、そのうち言葉づかいが変わってきましたね。いっしょに寝ていた仲間が先に逃げ出して、大事な輪転機は運び出していたのですが、寝ていた私には声をかけてくれず（笑）、つかまってしまいました。外人部隊側は本部構内を占拠しており、私はその拠点である本部に連れてゆかれそうになりました。ところが、西部講堂から本部に行くときに渡る東山通にさしかかり、車が途切れるのを待っていたとき、外人

部隊が私をつかんでいた手を少しゆるめたので、そのすきに外人部隊をふりはらって逃げ、一命をとりとめた経験があります。危なかった。

あこのころの全共闘にはいくつかのセクトも混ざっていたようです。私も教養のとき以来いろいろなセクトのメンバーと話す機会がありました。クラスには中核派の中心的人物がおり、よく電話がかかってきたものですが、彼はいまでは山梨のぶどう園で仕事をしています。

京大の文学部ではかなり紛争がありましたし、哲学科ではもともと院生と教員とが親しい関係ではありませんでした。ただ宗教学研究室は、例外的に院生と教員とがすごく親しい関係にありましたが、紛争のなかで一変してしまいました。宗教学の院生に、現在はラディカルなフェミニストとして知られる大越愛子さんがいました。大越さんは教養のとき私と同じクラスで、いわゆる「お嬢さん」でしたが、紛争のなかで全共闘についてしまいました。でも、いまでも個人的関係は悪くありません。ついでに言えば修士課程のときから学内では紛争で続き、入学試験が実施できず、試験は学外でおこなわれたものです。

- **その前後に全国若手哲学研究者ゼミナール（若手ゼミ）が始まったと思いますが、若手ゼミは全国唯研の設立の実質的な母体になっていますか。**

そうです。ただ、今日おこなわれている若手ゼミは、全国唯研とはほとんど関係ないようですね。もともと全国唯研のほうも変わりましたね。

若手ゼミ発足の話をする、京都大から名古屋大に移った太田直道さんがあるとき私に連絡をくれて、名古屋の吉田千秋さんが若手ゼミのようなものを考えていて京都の人たちと会いたがっているというので、私が名古屋に行き、3人で喫茶店で話をしました。京都に戻って向井さんや種村さんや河野勝彦さんや碓井敏正さんなど文学部の積極的な同世代の人々に名古屋での話を伝えたところ、向井さんが幹事的な連絡の仕事を自分がやりたいと手を挙げてくれ、若手ゼミは向井さん、京

院協の事務局長は私というふうには、事実上の分担がなされました。こうして若手ゼミが始まり、私は第1回からずっと参加してきました。若手ゼミは何年に始まったのですか……。

- **第1回は1971年だったようです。**

私の京院協事務局長が1972年だから、その1年前ですか。若手ゼミには、のちの全国唯研のメンバーが多数集まったと思います。当初から楽しい雰囲気でしたね。

東北から若手ゼミに来ていた人たちの中心的存在は伊坂青司さんだったように思います。それより上の世代の人はいなかったような気がしますね。東京では石井伸男さんや佐藤和夫さんがいました。全体に、思想や組織のありかたについて自由に議論できる雰囲気でしたね。

私は大学を卒業するときには高校教員になることも考えており、教職の単位もほとんど取ってありました。京都南の東寺の近くの高校で社会科の歴史の教育実習をやり、アメリカ独立戦争あたりのことを取りあげました。指導してくれた先生が、お世辞かもしれませんが、なかなかよい授業だったとほめてくれました。けれども、なにしろ紛争の最中で、私は京院協の事務局次長や事務局長だったので、そちらにかかりっきりで結局あと二科目の必須講義の単位が取得できず、教員免許はあきらめました。

大学院を出て私はなかなか就職できず、私の学年では私が最後まで残っていたと思います。私は京院協事務局長などいわゆる「政治的活動」をやっていたので、就職は難しいと思われていたようで、いろいろな人たちが非常勤講師を世話してくれました。非常勤はおもにドイツ語の授業で、京都教育大学、龍谷大学などあちこち行きました。神戸学院大学では法学部のような大講義室でドイツ語をやらされましたよ(笑)。当時は第二外国語が必須で、多くのドイツ語教員が必要でした。京大でも、ドイツ語学科の院生たちは修士修了で大学に就職してゆきましたが、それでもドイツ語の教員が足りない、哲学科のオーバードクター

にも声がかかったのです。この前後に私は、かつて岐阜の笠松にいたころに木曾川でやっていた釣りを思い出し、やりだしたらアパートの近くに桂川が流れていたこともあり、また釣りに凝ってしまいました。神戸学院大学の非常勤の帰りにいつも海に寄って、カレイ・キス釣りをやった覚えがあります(笑)。

● 若いころの研究内容をお話してくださいませんか。

全国唯研の最初の雑誌は『唯物論』ですが、そこに私はまず弁証法研究の関係でカントの変化・矛盾律について書きました。それとともに若いころは言語的矛盾と弁証法的矛盾との関係、論理的矛盾と弁証法的矛盾との関係などに関心に向け、弁証法関連のドイツ語の本をけっこう読みました。

● 卒業論文・修士論文はヘーゲルについてお書きになったのですね。

そうです。卒論は『精神現象学』の意識の経験を扱いました。もともとカントに関心があって『純粹理性批判』をずっと読んでいたので、『純粹理性批判』とからめて『精神現象学』の意識を考察したのですが、これは習作で、いまだここにあるのかわかりません。修士論文は『大論理学』を中心に、形式論理学と弁証法との関係などを主題にしました。そのころ、高校にお勤めだった鈴木茂さん(のちに松山商科大学教授)を中心に有尾善繁さんの自宅で『大論理学』の原書を輪読する「弁証法研究会」と称する会がありました。紛争であわただしかった時期にもかかわらず、私はそこに加わりました。鯨坂真さん、向井さん、種村さんらも一緒でした。6年余をかけて『大論理学』を読み終え、のちに、この顔ぶれで、おそらくヘーゲル論理学では初めてと思われる共著の新書版『ヘーゲル論理学入門』(1978年)を鯨坂さんがまとめ役になって出しました。この弁証法研究会で1973年に『現代と唯物論』という雑誌を発刊し、当時は「日本科学者会議京都支部哲学部会」の雑誌と位置づけられていましたが、これはのちの関西唯物論研

究会の雑誌『唯物論と現代』の前身といえるかと思いますが。さきほど全国唯研の『唯物論』に最初に書いた論文の話をしました。私が文字どおり一番最初に書いたのは、この『現代と唯物論』に掲載されたヘーゲル弁証法と形式論理学との関係についての論文だったことを、いま思い出しました。

また、「弁証法研究会」より少し遅れて見田石介さんが大阪でヘーゲル論理学の研究会を始められたので、そちらに合流しました。見田さんの大阪市大のお弟子さんが研究会会場として自宅を提供され、お弟子さんたちに混ざって私たちもその研究会に加わりました。その研究会で、私はお弟子さんの上野俊樹さんと一緒に世話人をつとめたのですが、上野さんはのちに立命館大の教授になって、50代の若さで亡くなりました。

それとはまた別に、立命館大の梯明秀さんに自分のゼミに来て発表してくれないかと頼まれ、修士論文の内容を発表しました。私の修士論文はきわめて抽象的な内容だったので、かなりそれを具体化させ、唯物論関係の当時の議論と絡ませて発表したところ、梯さんがすごくほめてくださいました。そこには、院生だけでなく梯さんを慕ってきている人々や、梯さんの同僚でフォイエルバッハ全集を翻訳刊行した船山信一さんもときどき来ていました。多作な船山さんと対照的に、梯さんはどちらかというと本をあまり書かない印象がありましたが、なぜか船山さんは梯さんに頭が上がらなかった感じでした。戦前の京都学派左派の中で人間関係もあつたのでしょね。私が梯さんとうとうきっかけで知り合ったのか、いまでは思い出せないのですが、彼が戦前に書いた『社会起源論』から学ぶところが多かったことを記憶していますので、そのへんの関係があつたのかなと思います。

梯さんや船山さんは弁証法研究会とはかかわっていませんでした。当時は、全共闘運動のせいもあってか、かなり人のつながりが入りこんでいたかと思います。

- 一部の全共闘は梯さん船山さんのもとに集まってきたのですか。

いや、全共闘にはそんな学問的・理論的な雰囲気はなかったと思います。全共闘は、マルクスとか社会主義とかの理論的なことよりも、一種の実存主義の心情に近いところがありました。全共闘のみならず当時は私たちもマルクスを読む一方でサルトルをよく読んだものですが、いまでは想像できない雰囲気ですね。「昼はマルクス主義、夜は実存主義」ということがばらばら流通していたころです。

- 1977年に戸坂潤賞を受賞した際の読売新聞のインタビューで「あなたはマルクス主義者ですか」と聞かれ、尾関さんは「そこ、規定せんとダメですか」と答えていますね。

私はマルクスやエンゲルスからおおいに学びますが、自分をマルクス主義者というのには少し抵抗感があります。そもそも私は「主義」という言葉があまり好きではありません。「主義」というと自分を限定してしまいますから。多様なものを学び、それで初めてなにかが出来てきて、その更新が続くのだと思います。かなり後のことですが、吉田傑俊さんも自分の立場を「マルクス主義」でなく「マルクス思想」と書いていましたね。

私たちの学生のときにはすでにソ連型マルクス主義の問題点が多々みえており、全国唯研が発足した背景にも、この問題意識があったと思います。とくに、民主集中制などの組織論にかかわる問題も大きかったですね。時代の大きな流れとしては、フルシチョフのスターリン批判をはじめ、さまざまな問題が出てきており、1968年の世界的な大学紛争や「プラハの春」があり、資本主義のみならず硬直したマルクス主義そのものが批判の対象になっている時期でした。

このような事情で、いわゆるマルクス主義という言葉に、私は少し距離を感じていました。最近ではエンゲルスに疑問を感じる人が多いですが、それでもマルクスやエンゲルス、とりわけ『経哲草稿』や『ドイツ・イデオロギー』などは、学問的活力の源泉になっています。

- 大学院を出られるころは、どのような状況でしたか。

大学時代には、院生協議会、底辺問題研究会など、いろいろな人のつながりができました。その後、なかなか就職はできませんでしたが、日本哲学会に論文を投稿して掲載されたことがあります。ヘーゲル論理学の反省概念と言語意味とを関係づけた論文でした。また、『言語』という雑誌にヘーゲルの言語哲学関係の論文を投稿し掲載してもらったことがあります。それから、大学院を出て4年目ぐらいに『現代と社会』という青木書店発刊の雑誌で、古在由重さん、森宏一さん、栗田賢三さん、真下信一さんなど当時の唯物論関係の錚々たる審査委員を擁した「戸坂潤賞」の募集が始まりました。ダメもとでこれに応募してみたら、幸い当選しました。戸坂潤賞は第3回まで「該当者なし」だったので、私が最初の受賞者になりました。おそらく審査委員会がしびれを切らして(笑)、とにかく受賞者を出しておかないと賞の存在理由がなくなると思ったのではないのでしょうか。たまたまうまくいって賞をもらうことができました。東京の学士院会館で授賞式がおこなわれ、京都から東京までの往復交通費はもちろん、賞金30万円、そのうえ立派な時計ももらいました。この時計はつい最近まで動いていましたが、とにかく私にとって戸坂潤賞受賞はとても嬉しいことでした。

さらによかったのは、受賞をきっかけに就職の話が3つほど来たことです。早く決まったところに行こうと思い、いちばん早かったのが東京農工大学でした。このとき29歳か30歳でした。

- ちなみに、それらは公募でしたか。

いや、一本釣りでした。おそらく人選委員が各自候補者を持ち寄って選考したのではないかと思います。当時あまり公募はなかったと思います。公募される大学もあったのですが、ほとんどは形式的な公募で、じっさいには人的つながりがものをいうことが多かったようです。いまは公募が規則で定められていますが、古い慣習が残っており、

なお問題はあると思います。

このようにして東京に出て来て、府中の栄町宿舍という住居に住むことになりましたが、ここがひどいところで、敗戦直後のバラックのような建物だったので、かなり早い段階でよそに移りました。

このころ発足したばかりの全国唯研が本格的に動き始めました。さっそく事務局幹事を頼まれ、事務局長は中央大学の長沼真澄さんでした。そのあとの事務局長が都立商科短大の仲本章夫さんで、彼の研究室で事務局会議が何度も開かれましたが、仲本さんはだじゃれの連発でした（笑）。

● **唯研周辺で、関西の雰囲気と東京の雰囲気との違いを感じることはありませんか。**

関西には一部に原則的なマルクス主義の立場の人がいたのにたいし、東京では人数が多かったせいもあるのか批判的な雰囲気がわりあい濃かったように思います。ただ私自身は大学のときに教条的などころから離れ、実践的などころで自由にものを考えることが多かったから、東京で全国唯研事務局に入ったり東京唯研に加わったりしても違和感がなく、東京が自分に合う感じはもっていました。

戸坂潤賞をもらったこともあり、東京に来てからあちこちで原稿を頼まれることがふえました。そのなかで大きかったのが『言語と人間』(1983年)で、これは30代なかばに書いたものですが、日本科学者会議「科学全書」の1冊として出されました。

● **この本は多くの人々が名著だといっています。**

いや、それは……（笑）。秋間実さんが積極的に推薦くださり、栗田賢三さんは「あらたな人間観がうかがえる」と書評で評価してくださいましたね。いろいろな方が良い書評を書いてくださり、この本に関連した講演依頼も本当に様々な分野からありました。おかげで『言語と人間』は10刷り、一万数千部まで行きました。森宏一さんも気に留

めてくださり、その後いくつか原稿を頼まれました。森さんには「ロシアで論文集の本を出すから書いてくれ。おれが訳してやる」といわれ、私は「言語と疎外」という論文を書いてお渡ししました。ですからロシア語の「言語と疎外」という論文はあるのですが、日本語の原稿がどこかに行っちゃって、いま読めません（笑）。森さんはロシア語が堪能で『チェルヌイシェフスキー著作集』や『ゲルツェン著作集』などを翻訳されていますが、それらを一式、私にくれました。なぜかわかりませんが、ずいぶん私は気に入られたようです。栗田さんは私の論文について、これまで語られてこなかった人間観が呈示されている、というように高い評価をくださいました。栗田さんは『マルクス主義における自由と価値』(1975年)で、マルクス主義では人間性は変わってゆくというけれども、そのなかで変わらない人間性があるのではないかと書いており、それに私はオーバードクターのころに共感したものです。このことで思い起こすのは、寺沢恒信さんがソ連崩壊後に東京唯研が出した論文集（『マルクス主義思想 どこからどこへ』(1994年)）で、社会主義になったら人間性も根本から変わると思っていた、この点は誤認した、と率直に書いていたことです。

1960年代の紛争から1970年代にかけて全般的に従来のマルクス主義を見直す雰囲気が強くなり、そのような雰囲気の中で若手ゼミも始まりまし、全国唯研も創立されたと思います。

● **弁証法的唯物論と実践的唯物論という議論は、大学院生のところですか、もっと後ですか。**

始まったのは、大学院を出たころといえると思いますが、盛んになったのは私が東京に来てからの30代以降です。いわゆる実践論争ですね。さきほどお話ししたように、すでに大学紛争のころからソ連型マルクス主義への批判的ムードはあったわけです。ただ、きっかけは秋間さんらによって翻訳された東ドイツの哲学教科書（1974年）の体系論争だったと思います。対立構造の一方は弁証法的唯物論の重視で、旧来の路線に近い立場、そ

の極端なたちが、弁証法的唯物論が社会に適用されて史的唯物論になるというスターリンの立場ですが、さすがにこれを主張するひとはいませんでした。他方はザイデル、コージングら、実践を重視する東独の理論家の立場です。ここでは実践概念の意義が中心になりました。ごく大雑把にみれば弁証法的唯物論では認識論が重視され、実践的唯物論では史的唯物論が重視されたといえます。ただ、観念論か唯物論かという論争なども関係して、議論は絡み合っただけで、一方では教条主義が批判され、他方では不可知論などの相対主義が批判されるという議論もあったと思います。これらが議論の主な流れでした。

ただ私は、マルクスが「フォイエルバッハ・テーゼ」で「人間的な感性的活動、実践」について強調したさいに、観念論が展開した意識の「能動的側面」に評価してふれていることから、こんなふうに思いました——つまり、カントによってドグマティズムとスケプティシズムの批判として始められた超越論的意識、そしてヘーゲルの意識(精神)の経験の弁証法的運動、さらにフォイエルバッハの観念論批判に至る過程のなかで、すでに「実践」のそういう視点からの議論は基本的には決着がついているのではないかと。

したがって私は、こういった対立構造とは別のスタンスをとった問題意識で実践概念に関心をもっていました。労働を重視するのは意味のあることですが、実践というときとさまざま、目的を立てそれに向かって努力してゆくという生産労働型の実践が主眼とされることが多かったのです。しかし、マルクスには、「労働と交通」という仕方で、「物質的交通」だけでなく「精神的交通」を語っている視点もあることに着目しました。それを私は言語やコミュニケーションへの関心と結びつけました。つまり、実践というさいにもコミュニケーション型の実践も議論の俎上にのぼすべきだと思うようになりました。この点で、私はとくにハーバマスに影響を受けたというよりも、言語やコミュニケーションを考察してゆくなかでいちばん大きな位置を占めたのは、むしろオースティンの言語

行為論でした。ハーバマスのコミュニケーション論も、明示されてはいませんが、じつはアーレント以上に、オースティンの言語行為論をきっかけに展開したものと思います。労働型の実践概念とは異なる、もうひとつのコミュニケーション型・言語行為型の実践概念があります。この実践は条件次第では制度変革に直接にかかわる場合もあります。民主主義を前提にして互いに理解し納得して合意を形成してゆくうえで、コミュニケーション型実践は大きな存在です。とりわけ高度に発達した資本主義社会においては、そういえます。

#### ● 1980年代後半でしたね。

そう、私が30歳代後半のころです。あのころ、広くゆきわたるような出版物ではありませんでしたが、人間の実践とマルクス主義を取りあげた論文や、人間の自由と決定論というようなソ連型マルクス主義を批判した論文をいくつか書きました。

重要なのは、実践概念を強調するだけでなく、一歩進めて実践概念の内容や構造を論ずるべきではないか、とくにコミュニケーション型実践に注目すべきでないか、と私は思いました。こうした見解で私はこれらの論争のなかで自分なりのスタンスを取ってきたつもりです。

実践とコミュニケーションとを関わらせた私の考えにたいして、島崎隆さんが評価しつつも疑問があるということで80年代末に『思想と現代』で「往復書簡」による誌上討論をしました。これによって、私の考えも深められました。そして、こうした私の見解をまとめた仕方で「人間実践の概念とマルクス主義」という論文であきらかにしました(東京唯研編『マルクス主義 どこからどこへ』(1992年)所収)。その要点はつぎのようなものです。つまり、実践概念の内容としては、すでに話しましたように、第一は、労働型実践とコミュニケーション型実践の二つから成り立っており、両者の区別と連関を明らかにする必要があるとし、アーレントやハーバマス、ガダマーにふれて、それを私なりに解明しました。第二は、生活実践と変革実践の区別と連関が解明される必要が

あり、これを論じました。

● **その後、問題関心に変化がありましたか。**

少し話を戻すことになりましたが、東京唯研で私は早い時期に編集委員長を引き受けました。そのとき古茂田宏さんや竹内章郎さんが編集委員でしたが、力を入れて人間観を大きく特集したことを覚えています。特集のタイトルは、「人間観の再構築へ向けて」というもので、巻頭言を高田求さん、巻頭論文を小原秀雄さんに書いてもらいました。それは通常よりもかなり大部の『唯物論』(1985年)になりました。のちに私は、小原さんと一緒に総合人間学会の創立にかかわることになりますが、人間観・人間学への関心は当時からありました。

また当時、唯研周辺では言語にたいする関心があまり高くないなかで、言語を研究対象にしていた私は、言語とマルクスの思想とを関連させるような原稿や講演をよく頼まれました。また、このころヴィトゲンシュタインの関連で、オーストリアのオイゲン・ヴェスター（ユネスコで科学技術言語の標準化原理に関して大きな実績をなした）の言語哲学に関心をもち研究したことがきっかけで、彼のお弟子さんたちとつきあうようになりました。そして、一緒に『ターミノロジー学——ヴェスターの言語哲学とその応用』(1987年)という本も出版しました。

東京農工大学は理系の大学なので私などは文部省の在学研究の機会がなかなか得られませんでした。30歳代末に日墺交換研究員にこの関係で応募したところ、書類審査が合格して大使館に呼ばれて面接試験を受けました。面接では、ドイツ語であまりうまく答えられなかったのですが、これこれ、こういうことですよ、と向こうが助け舟を出してくれました(笑)。いちおう京都教育大学や龍谷大学でドイツ語の授業をずいぶん担当してきたし、学生1~2人を相手にドイツ語の補習もやりましたから、それらの職歴がプラスになったのでしょう。じっさいに若いころは弁証法関連の本やフィヒテ、ヘーゲルなど、わりあいドイツ語を読んでいました。

交換留学ではウィーン大学の科学哲学の附属研究所のようなところに行きました。ここはユネスコと関係した機関でもあり、国際的な共通言語のようなことの研究がなされていました。所長はヴェスターの弟子のフェルバー教授で、若手・中堅にはガリンスキーやネドビティがいました。この研究所が共催するドイツでの国際学会で発表することが留学の条件でもありましたので、ドイツ語の論文を必死になって書きました。

ウィーンは東側世界と西側世界との狭間にあり、戦後ずっと社会民主党が政権をとっていて、土曜・日曜が完全に休みなんです。ちょうど私がウィーンに行くときに日本では24時間営業のコンビニエンスストアが始まったところでしたが、ウィーンに行ったら24時間営業どころか、すべての商店や会社が週に2日、完全に休んでいたのです。観光客用のレストランは別として、それ以外は働かせたら罰金をとられます。どうしても働いてもらう必要がある場合には、手当を2倍も3倍も出さなければならなかったのです。このように土曜・日曜が休みなので、研究所の人たちも金曜日の昼ごろになると交代でスーパーに買い物に行っていました。1年後にウィーンから日本に帰ってきておどろいたのは、24時間営業や過労死の事実でした。

● **それが『遊びと生活の哲学』執筆の動機になったのです。**

そうそう、まさにそうです。この本は、書かざるを得ないような気持ちになって書いたものです。マルクスにおける「労働の解放」と「労働からの解放」の二重の解放や自由時間の重要性も絡めて論じました。

ウィーンから帰国してしばらくたつと、東京農工大学で一般教育部をもとに「人間自然科学部」を創設する構想が出てきました。立派なパンフレットを作成し、教養部に相当する一般教育部から学長を出して、文部省に認めさせる直前のところまで行ったのですが、急に文部省の方針が大幅に変わってしまい、一般教育部が解体されることに

なりました。もっとも農工大では制度的にはもともと一般教育部という組織はなく、そこの教員は農学部か工学部かのいずれかに属しており、私は農学部属していました。私たちは一般教育部の教授会にも出て、農学部の教授会にも出ていました。ただ一般教育部には学生がいなかったのも、その点は専門課程の教員たちとまったく違いましたね。

東京農工大学の一般教育部のときは楽しかったですよ。当時は組合活動も盛んで、私も組合委員長をやりましたし、みんなで釣りもやりましたからね(笑)。授業は「哲学」を週に2コマと教職だけというときもありました。そのころ「倫理学」の授業は非常勤講師に担当してもらっていましたが、ダメでもとものつもりで「倫理学」の専任教員を置く案を提起したところ、文部省が道德教育を重視していたこともあり、ポスト新設が認められました。

● **全国唯研でかかわった機関誌編集や出版企画についてお聞かせください。**

秋間実さんが二度目の全国唯研委員長のときに私が『思想と現代』の編集委員長になりました。全国唯研の機関誌として最初は『唯物論』が、つづいて『唯物論研究年報』と『思想と現代』とが短い期間でしたが並行して刊行されました。『思想と現代』はその後しばらくつづきますが、年4回の季刊なので、編集がたいへんでした。このとき事務局長が後藤道夫さんで、ときどき後藤さんといっしょに白石書店の社長と交渉しました。出版状況がだんだん悪くなってゆくころでした。

『思想と現代』の「コンピュータ」特集は私の編集委員長のところですが、コンピュータを特集した左翼雑誌は当時まだあまりなかったと思います。これには私が言語論関係の研究していたことがかかわっていました。大月書店が時代に先駆けて『コンピュータ革命と現代』(1985年)という3巻本を出しましたが、その編集委員会に参加を求められ、第1巻に私も書きました。私は科学全書『言語と人間』で知り合いができ、大月書店ともつながり

ができていたので、言語哲学をやっているなら書けるだろうということで頼まれたのでしょう。コンピュータや情報科学に私はそのころから関心がありましたね。

全国唯研委員会のなかに企画委員会ができて、それにも私は長くかかわり、1997年には企画委員長もつとめました。いちばん鮮明に思い出されるのはシリーズ『現代批判の哲学』ですね。このシリーズでは刊行委員会を立ち上げ、実質的には吉田傑さんと渡辺憲正さんと私とが中心になって、青木書店から30冊ぐらい出しました。いまでも思い出されますが、小田急線の鶴川駅の近くに温泉を引いてある風呂屋があり、そこで夕飯をとりながら3人で話したものです。「刊行のことば」もこうして3人で手直ししました。このシリーズには多くの若手会員に書いていただき、しかも印税が1冊につき30万円ぐらい出て、それを唯研に寄附してもらうことになっていたのも、この企画は唯研財政にあるていど貢献したかもしれません。これは私が50歳のころの話で、シリーズ刊行開始が1998年ごろでした。そして唯研委員長になったのが53歳ですね。『現代批判の哲学』シリーズは私なりに力を入れて刊行しました。まず執筆者の名前を挙げ、その人々に書けそうな書名案や内容予定を聞いて、シリーズ全体の計画を立てましたが、当初の予定が変更されたこともしばしばあったと思います。

ちょうどそのころ(2000年)青木書店の編集長であった桜井香さんに声をかけられたのが『哲学中辞典』の企画でした。『哲学中辞典』はもともと青木書店での刊行が予定されたのです。その少しまえに私が桜井さんに頼まれて青木書店で『現代コミュニケーションと共生・共同』を出したのですが、そのころから桜井さんは『哲学中辞典』出版を考えていたようです。話を受けた当初は『哲学中辞典』企画を全国唯研としてすすめようかとも考えましたが、後藤さんと相談したところ、全国唯研だけでは書き手が足りず、唯研以外にも執筆を依頼する必要があるということで、全国唯研の名で刊行するのは控えました。ただ、じっさい

には全国唯研のかなり多くの会員に書いてもらったし、編集委員の全員が全国唯研メンバーでした。

『哲学中辞典』の編集には、亡くなった古茂田さんをはじめ、吉田傑俊さん、後藤道夫さん、渡辺憲正さん、佐藤和夫さんらが尽力くださいました。また、中村行秀さんが『哲学入門』(1989年)で、幅広い読者層に向けた文章が書ける方であることがわかっていたので、中村さんにも入っていただきました。ただ、2001年に始まったこの企画はそのかんに桜井さんが青木書店を退社したので編集担当者が角田三佳さんに代わり、角田さんは熱心に取り組んでくれましたが、いろいろ事情が重なって途中10年以上の中断の憂き目に遭いました。原稿の8割ほどは揃っていたのですが、困難な状況が多々あり、そしてまた青木書店がこれを刊行できる経営状態でなくなったため『哲学中辞典』は宙に浮いてしまいました。企画が再開したのが2012年で、私が定年退職で少し余裕ができ、吉田さんや渡辺さんに声をかけたところ賛同してくれて、まずは角田さんが在職する大月書店での刊行が検討されました。大月書店を三人で訪れ、社長・編集長とこちら側とで協議したのですが、社長が乗り気でないようでした。原稿の8割以上を集めてきた角田さんはずいぶん残念だと思っています。その後いくつかの出版社に当たりましたが、けっきょく知泉書館に引き受けてもらうことになりました。たまたま2005年に私が日本哲学学会の事務局長になったときに、その日本哲学学会の機関誌刊行を法政大出版局から引き継いだのが知泉書館でした。

ちなみに日本哲学学会事務局を農工大で引き受けましたが、当時この事務局を引き受ける東京の大学がなく、日哲の会長であった加藤尚武さんが困り果てて当時運営委員の一人であった私に話をもってきました(これは唯研関係者で引き受けてくれないかということの意味していました)。このことでは、一橋大の唯研メンバーとずいぶん相談した思い出があります。結局、私が事務局長を引き受けましたが、農工大には大会シンポジウムを開催するほど広い教室がないので、大会は一橋大で

開催してもらい、島崎隆さんに大会の責任者になってもらいました。事務局では、福永真弓さん、大屋定晴さん、片山善博さんなどが幹事として仕事をしてくれました。日本哲学学会事務局幹事は手当の条件が比較的よかったですね。とうじ日本哲学学会は2000人近くの会員を擁していましたが、法政大学出版局発行の機関誌にかんしてもバブル時代の契約が続いており、出版費用として過剰な支払いをしていたので、法政大学出版局と交渉して半額近くに減らしてもらったように記憶しています。それでもまだ高いと思われ、入札することになり、もっと安く制作できるという知泉書館に発行元を移したのです。

- **全国唯研と日本哲学学会との関係、全国唯研が日本哲学学会にはたらきかけるべきことなどで、お考えがあればお聞きしたいと思います。**

日本哲学学会の関係では、種村完司さんが熱心に取り組んでいますね。吉田傑俊さんや私も長いこと日本哲学学会の役員をつとめましたし、シンポジウムのテーマ設定についても積極的にはたらきかけました。全国唯研に近いテーマ、全国唯研のシンポジウムとして企画されてもおかしくないようなテーマを、日本哲学学会の役員会でいくつか挙げました。それから私は中国の卞(べん)崇(すう)道(どう)さんの提案をもとに日中哲学交流としてフォーラムを企画し、交流団長に会長の野家啓一さんを据えて日本側の実行委員長になりました。種村さんにも声をかけたところ精力的にかかわってくれて、その流れがいまでも続いています。古茂田さんもかなり尽力してくれましたし、全国唯研関係者がいなかったら日中哲学研究者間の交流はできなかったと思います。それ以前に、卞崇道さんたちのグループと吉田さんを代表とした私たちのグループが北京と東京で〈共生〉のシンポジウムをひらいたのですが、その蓄積が大きいと思います。中国側には卞崇道さんたちのお弟子さんも加わりました。

- **そのお弟子さんのひとりが王青さんですか。**

そうです。王青さんは卞崇道さんのいちばんの直弟子のような存在です。卞崇道さんは吉田傑俊さんと近い世代で、それより若い世代がすこし空いてしまっているようですが、現在、王青さんが中華日本哲学会の会長をしています。

● **卞崇道さんのお名前は中国の方々から何度もお聞きしました。**

そうですね。卞崇道さんは広い人脈をもっていて、卞崇道さんより年長の杭州大学の王守華教授が、環境・エコロジーを主題として国際シンポジウムをひらくというので、亀山純生さんや村瀬裕也さんや私、それに加藤尚武さんなども招かれました。インドからの研究者も来ていました。この杭州大学の王さんは安藤昌益を研究していて、町田の和光大学に来て安藤昌益研究家の安永寿延さんのもとで研究していたことがあります。その王守華さんと卞崇道さんが親しい関係でしたので、二人がそろったときに私が車で富士山に案内したら、たいへん喜んでくれました。

● **卞崇道さんのご専門はなんでしたか。**

日本近代哲学です。西田幾多郎や京都学派が中心でしょうね。それだから卞崇道さんは吉田傑俊さんとも話が合うようです。私は卞崇道さんの北京のお宅に行ったこともあるし、卞崇道さんがお子さんを連れて私の自宅に来たこともあります。卞崇道さんが東大の研究員であったとき、家族で日本に来ていたのですが、私の家族と亀山さんの家族とで卞崇道さんのお宅を訪問したことがあります。中国料理をごちそうになりましたよ（笑）。卞崇道さんとそのような関係にあった私が日本哲学会の事務局長になったので、とうじ中華日本哲学会の会長であった卞崇道さんから日中の哲学上の交流の話がもちかけられたのです。たどってゆけば、やはり全国唯研がらみの人脈だったのです。

● **2019年におこなわれた日中交流も、日本哲学会と中華日本哲学会とがそれぞれ窓口になっていますね。**

これらの交流は社会科学院の哲学研究所の主導で特定の中国の大学を会場として開催することで始まりました。卞崇道さんや王青さんはもともと社会科学院に属していました。いちばん大きいのは、卞崇道さんのグループが日本との交流に熱心に取りくんでくれたことでしょう。卞崇道さんは哲学に関心が強かったので、まず日本哲学会とつながりができましたが、王青さんだったら、こうはならなかったでしょうね。卞崇道さんだったからこそ、取っかかりとして日本哲学会と交流しようというふうに進んだと思います。

● **全国唯研の理論的な方向について、なにかお考えのことはありますか。**

戦前の戸坂潤の流れを汲んでいることもあって、さまざまな問題意識で多様な課題に理論的に取り組むことが、ひとつの大きな方向だったでしょうね。そのためにはやはり自然科学や哲学が相応の位置を占めたほうがよいと思いますが、このあたりが少し薄くなっているのではないかという気がします。私が委員長のころまでは、北海道の物理学者の田中一さんや生物学者の小原秀雄さんなど、けっこう自然科学の研究者が活躍していたように思います。京都・大阪には自然科学者の会員が多く、関西唯研ではいまでも自然科学系の研究が一定の割合を占めていますね。近年、新自由主義が跋扈していて、それを批判することに力を入れるのは大切なことですが、学会として多様な課題に取り組むという点では、テーマの設定がやや狭くなってきたのではないかと思うこともあります。

私自身はわりあい自然科学に関心があるほうだったことに加え、とくに人間学に強い関心を持っており、2006年には総合人間学会という学会の立ち上げにかかわりました。科学全書で『言語と人間』を上梓するころから私は小原秀雄さんと親しくなりましたが、小原さんの『人に成る』（科学全書）を読んで、そこに〈人間による自然の社会化〉というマルクスの構想のひとつの具体化をみた思いでした。また東京農工大学にいたサル学の水原洋城さんが私の『言語と人間』を気に入ってくれ

ました。『言語と人間』で私はサルのことを書いており、伊谷純一郎さんの研究もかなり重視していたので、水原さんたち霊長類研究所の人々が気に入ってくれたのでしょう。小原さんや水原さんら霊長類研究所の東京在住グループと、私はかなり早い段階で親しくなりました。

総合人間学会の前身として「人間学研究所」というのがありました。小原さんを敬愛する、ある会社の社長が研究所の会合のために大久保駅のすぐ近くの部屋を提供してくれたのですが、その部屋には人間学関係の本ばかりが並んでおり、社長は「実用人間学が専門だ」と称していました。そこに私も顔を出し、小原さんに頼まれてちょっとした発表をしたこともあります。この人間学研究所を拠点として小原秀雄さんと柴田義松さん（ヴィゴツキー『思考と言語』の翻訳者）が中心になって動きだし、そこに憲法学者として著名な小林直樹さんが加わって「人間学研究会」を立ち上げたのです。小林さんはじつは昔から法学よりも哲学や人間学を専攻したかったようです。総合人間学会の創設にかかわったみなさんは当時すでに70歳代後半だったでしょうから、60歳そこそこの私がいちばん若かったんです。自然科学、とりわけ生物学の研究者が多かったですが、全国唯研関係の哲学研究者もいました。また、市民の参加もあったことが特徴的でした。私は後藤道夫さんに「ぼくは総合人間学に取り組むから」と役割分担のような話をしたこともあります。

全国唯研が多様な課題に取り組むためにも、並行して総合人間学に力を入れるのはちょうどよいように思います。この点で、早逝されましたが、センスのよい石井伸男さんが「マルクスの社会理論の背景には人間観があるよね」と言っていたことを思い起こします。

私は全国唯研と総合人間学会とが相互補完的に発展してゆくべきだと考えています。それで全国唯研関係のかたがたに、発足時にだいたい総合人間学会に加わってもらっていますが、残念ながらそれが若い世代に十分につながっていません。これまでは全国唯研と総合人間学会とが、一方が取り

組まない課題に他方が取り組んできたという思いはあります。最近も総合人間学会の大会シンポジウムでは、「科学技術時代における総合を考える——文系不要論に抗して」というテーマを取り上げ、両方の会員である竹内章郎さんにもパネラーとして報告してもらいました。私の前後の団塊世代が引退してゆくと、全国唯研と総合人間学会との関係が後の世代によって再構築される機会になるかと思っています。

- **全国唯研の若手中堅の会員が総合人間学会に入る例は少なくないと思いますが、逆に、昨今の新自由主義的政策を疑問視する総合人間学会会員が全国唯研に入るかということ、容易でないかもしれませんね。**

戦前以来の経緯を知っていれば、唯研の活動に意味があることはわかるでしょうし、総合性という点で両者はよく似ているのですが、取り組む課題の比重の置きかたが、一方は社会、他方は人間と、やや異なるかもしれませんね。もともと総合人間学会は人間について分野横断的に学問的研究をおこなうことが主課題で、政治的には左翼良識派が多数という感じでしょね。

全国唯研はもともと「批判的」色彩が濃く、それが積極的な意義なのですが、そのことはシリーズ『現代批判の哲学』の題目になっているとおりです。唯研創立30周年記念の3巻本の論集などの企画でも「批判的」であることが謳われていますね。あの論集の企画は私が提案したもので、それにたいして、昨今の出版事情からして刊行はむずかしいという意見もありましたが、豊泉周治さんや古茂田さんが積極的に受けとめてくれました。あの論集については、ちゃんと印税の契約書も交わしましたし、「持ち出し」にはなりません。けれども、あの論集のあとは、出版状況が急激に悪化して、印税どころか、そもそも出版が困難になりましたね。

- **現在も全国唯研委員会では『現代批判の哲学』のような本をもっとコンパクトにして出し**

てゆく企画が進行中です。

そうですね。青木書店も大月書店も印税をきちんと支払ってくれる出版社ですし、うまくいくとよいですね。30周年記念の3巻本は、私たち団塊の世代から次の世代への移行を意識したものだっただと私なりに思っています。次の世代が編集の中心になって、各巻に団塊世代のベテランがそれぞれサポートする配置になっていました。結果的に3巻本となりましたが、もともと4巻本が想定されていたと思います。

- さかのぼっていえば 1990 年代なかばに「ラディカルに哲学する」シリーズが出ましたね。

あれも大きな役割を果たしましたね。全国唯研の企画ではありませんでしたが、実質的には執筆者のほぼ全員が全国唯研会員でした。佐藤和夫さんの山梨県の別荘で合宿して内容の検討を重ねたものです。ほかに『ハーバマスを読む』『アーレントとマルクス』なども唯研会員によるものですが、これらは唯研の企画ではなかったかな。

- その2書は、どちらも唯物論研究協会編ではなく、『ハーバマスを読む』は吉田・尾関・渡辺編、『アーレントとマルクス』は吉田・佐藤・尾関編のようです。

そうでしたか。ただ、印税は唯研の方に入れたように記憶しています。そういえば大月書店で私がかかわった多くの本は『言語と人間』以来ずっと柴田章さんが編集を担当してくれたものです。彼のコメントはいろいろ参考になりました。

唯研の委員長であった古田光さんを中心に集まっておこなわれた「古田ゼミ」にも思い出があります。吉田傑俊さんや渡辺憲正さん、佐藤和夫さん、亀山純生さん、古茂田宏さんら数人で、古田先生のご自宅で、横浜やのちには三鷹でやりました。古田先生は人間学についてお書きになっていたこともあり、私は懇意にさせていただきました。ただ古田さんは議論の最中に口を挟むことが少なく、黙って聴いておいでのことが多かったですね。古田先生が委員長になられたのはいつごろでした

っけ。

- 1990 年から 1992 年までです。秋間委員長のつぎですね。

すると私がまだ編集委員長だったころかもしれませんね。

吉田傑俊さんの世代から私たち団塊の世代まではおおむね、集団でなにかをやるが多かったと思います。それより上の岩崎允胤さん、秋間実さん、芝田進午さんの世代は、個別に研究して、あまり相互のつながりがなく、共同での研究がなかったようで、それを聞いてちょっと意外に思ったことがあります。私たちはむしろ合宿までして共同で研究するスタイルで、これには若手ゼミの経験が大きかったと思います。この共同して研究するスタイルが全国唯研のひとつの力になったといえるでしょう。

- 全国唯研ではかつて若手ゼミに代表されるような哲学出身の会員が多数を占めていたように思われますが、いまでは哲学を専攻した会員が減少し、社会学や教育学の研究者が増え、多彩になってきたといえます。研究の土台がやや異なるので、もしかしたら共同で研究するのがむずかしくなっている側面があるかもしれません。

後藤道夫さんもかつては日本哲学会に入っていました。辞めてしまいましたね。

全国唯研の組織でとても残念だったのは、古茂田宏さんが早くに亡くなったことです。古茂田さんには委員長になってほしかったですね。亡くなる数か月前に古茂田さんを佐藤和夫さんと一緒に病院にお見舞いしたときは、わりあい元気で、坐ってふつうに話をしたのに……。総合人間学会でも私が編集委員長のときに古茂田さんが副編集委員長をつとめてくれていて、編集委員長を古茂田さんに代わろうというときに亡くなってしまいました。日本哲学会のさきの日中交流企画をふくめ、古茂田さんとはいくつもの仕事を一緒にしたものです。

- 1995年の『現代コミュニケーションと共生・共同』以来たびたび「共生」という言葉が用いられますが、「共生」という言葉を使い始めたきっかけはなんですか。

「共同」は私たちがずっと使ってきた言葉ですが、「共同」だけでは不十分に思われたことが大きいですね。『現代コミュニケーションと共生・共同』で取りあげたのは、いじめの問題、環境問題、外国人との共生など、さまざまな社会問題でしたが、「共生」という概念で、共同をふまえた、あらたな社会関係の次元を開いてゆく必要があるのではないかと思ったのです。あらたな社会関係は単なる共同ではなく、共生的共同ということです。また、人間－自然関係において、欧米と異なる日本的な共生の由来がかかわってきます。とくに自然との関係において、欧米的・近代的な自然克服でなく、ある種の〈自然との共生〉のようなものが日本では潜在的な意識のレベルで共感されやすいといえます。私も、亀山さんなどと一緒に東京農工大学農学部に「人間自然共生学コース」を設け、農経の教員と一緒に大学院に「共生持続社会学専攻」を置くというように、共生という言葉を使ってきました。この延長で「共生社会システム学会」も立ち上げました。

また逆に、当時すでに「共生」という言葉がかなり使われていたので、〈共生〉を批判的にこちら側に取りこむ意図もありました。井上達夫『共生の作法』のように、共同に対置して共生概念が用いられる向きもあり、これをきちんと批判しなければならなかったのです。共同と共生とは相反するものでなく、これらを両立させることが共生概念を充実させることになるのです。いまでも、「共生」という言葉が或る意味では仏教由来ということもあり、日本人のなかから共生についての議論はたくさん出てきますね。

- 共生という言葉は日本で日常語として定着しているのでしょうか。

共生という言葉が定着しているのは、障害者や

外国人にかんして用いられる場面、多文化共生が語られる場面においてですね。政府の政策にも「共生」が盛り込まれているぐらいです。ただ私は共生概念をもうすこし哲学的に広げて、人間と自然との関係もそのなかに入れて考えるのが主眼だと思っています。近代主義・近代思想とは違った、脱近代思想のキーワードのひとつとして〈共生〉を挙げたいと思います。

私が全国唯研委員長のときの事務局長が豊泉周治さんでしたが、それ以降も豊泉さんとはいろいろ話す機会があり、豊泉さんは共生・共同にかなり共感してくれていました。その共感は、若者たちにかんする豊泉さんの研究にも関係していたかもしれません。

- 『増補改訂版 言語的コミュニケーションと労働の弁証法』のまえがきに、芝田進午『人間性と人格の理論』に親しみを覚えながらも違和感があり、それがコミュニケーションと労働の弁証法の議論になった、と書かれていますが、そのあたりを。

さきほども実践概念の関連で少しお話ししましたが、『人間性と人格の理論』は私が大学院のころに出て、これは名著といわれ、たいへん勉強になりました。ただ、教育活動をふくめ人間のあらゆる活動を労働モデルで理解するところに、違和感を覚えました。教員が教育労働者としての権利を有するのはよいとしても、目的合理的な労働モデル、典型的には肉体労働や物質的な労働を指す労働モデルで、教育活動が語れるかどうか。少なくとも『人間性と人格の理論』ではそのように解釈されていると思います。労働の重要性を強調するあまり一切の人間活動を労働モデルで一元的に理解しようとする傾向は、ソ連型マルクス主義よりも芝田進午さんのほうが強かったかもしれません。芝田さんには、もちろんソ連型マルクス主義を批判する思想もあったでしょうが、ソ連型マルクス主義に近い面もあったようです。大枠では、ソ連型マルクス主義には労働モデルをもとにした実践の概念があり、しかも科学技術もそれと同じよう

にとらえられていたといえます。科学技術革命などについても芝田さんの議論とソ連型マルクス主義とのあいだに共通性があったでしょう。そこでコミュニケーションの実践的な意味が重要になってくるのです。そういう問題意識が私にはありません。

「労働一元論」という言葉は佐藤和夫さんが我々のうちで最初に使ったのではないかと思います。このような言葉で私や佐藤さんや古茂田さんが批判的な理論を考えていました。当時は古茂田さんや佐藤さんが、私の立ち位置にいちばん近かったような印象があります。

ソ連型マルクス主義を批判する点では共通していても、さまざまな立場がありました。後藤道夫さんや中西新太郎さんは別の立場での批判の仕方をとっていたと思います。多様な批判的活動があったわけで、各自の持ち味とともに民主主義を重視していたともいえます。

『言語と人間』を書いたあと、私が40歳ぐらいのときでしょうか、当時もはやされていた浅田彰『構造と力』を批判するような論文を『文化評論』誌から依頼され「現代の言語観と人間観を問う」を書いたことがあるのですが、なぜかこれを芝田さんがほめてくれて、芝田さんの自宅での集まりで発表してくれといわれて、訪ねていったことがあります。あの論文は浅田彰批判だけでなく、ジョージ・オーウェル『1984年』などの意味するものも狙上りのせたものですが、オーウェルの小説は当時のソ連の「収容所列島」や全体主義を批判するものでしたし、芝田さんもソ連の全体主義にたいしては強く批判していましたから、私の論文に共感してくれたのかもしれませんが。ですから芝田さんと私とは一面で批判し他面で共感するという、よい関係だったと思います。

● 尾関さんも「労働かコミュニケーションか」ではないですね。

そう、「労働もコミュニケーションも」立てるスタンスです。この点が、ハーバマスやアーレントと違う点です。たとえばアーレントは極端で、労働

でなくコミュニケーションを重んじますが、アーレントと比べるとハーバマスはまだ労働を重視しています。ハーバマスにおいては、労働の意義がシステム世界を構成するところに求められ、生活世界は了解志向的コミュニケーションによって再生産され、システム世界は目的合理的な労働型行為によって再生産されるとされます。システム世界の肥大化によって生活世界の人間的という意味あいシステムに侵されていくこととなります。「システムによる生活世界の植民地化」という議論には、なにか、労働によってコミュニケーションが侵されるというような、ややアーレントのニュアンスが出てきているように思われ、そこを私は『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』で批判しました。むしろ生活世界はコミュニケーションだけでなく自然と循環する人間的な労働によって構成されるのであり、他方のシステム世界も、疎外された労働と疎外されたコミュニケーションとによって構成されるのです。ですから、どちらにも労働とコミュニケーションがあるのですが、それらの性格が、生活世界とシステム世界とでは異なると捉えなければならないと思います。この理解には共感してくれる人がけっこうおり、それだから『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』の増補版の刊行を書店から依頼されたのだと思います。

50歳のころに東京農工大学農学部で「人間自然共生学コース」ができ、私はそこに所属したこともあって、私の研究のウェイトは言語・コミュニケーションから環境・自然に次第に移りました。当初は「自然とのコミュニケーション」というような議論にかかわりましたが、徐々に環境問題中心の環境哲学に向かい、環境哲学研究室もできました。全国唯研と直接関係するところは多くないかもしれませんが、環境思想系の共著はある程度出しました。亀山純生さんはもちろん、武田一博さん、岩佐茂さん、高田純さんら全国唯研のメンバーとともに『環境哲学の探求』、『エコフィロソフィーの現在』、『環境思想キーワード』などを上梓しましたが、とくに『環境思想キーワード』

では多くの若い人たちにも書いてもらいました。それと平行して、若い人たちに主体になってもらって「環境思想・教育研究会」も発足させました。この研究会の雑誌『環境思想・教育研究』を通じて、中国や韓国の研究者だけでなく、オーストラリアや米国など欧米の左派の環境思想の研究者と交流することができました。その関係で『環境哲学のラディカリズム』という本も出版しました。また、のちには、この研究会から若手を中心に岩波から環境思想のブックレットも発刊しました。

私自身の研究成果としては、環境思想をつうじて農業問題の重要性や深い意義がわかってきたことが挙げられます。先日東京唯研で「いままぜ変革思想にとって農業問題か」というテーマで報告をしました（2019年9月）。やはり農業問題はさまざまな意味で考えなければならない事柄で、現在のような農業問題の状況が作りだされていること自体がグローバルに、ローカルに、いろいろな意味をもちます。労働者と農民との分断、エコロジズムと労働運動との分断など、多様な分断があるでしょうが、この分断の克服に目を向けることに、現代日本社会の変革へのヘゲモニーを考えてゆくうえで大きな意味があると思います。このあたりの問題にいかに取り組むか、そのための社会理論の構築が今後の課題になるでしょう。

ごく最近の話でいうと、マルクス生誕200年ということもあり、マルクスを改めてすこし辿ってみたところ、晩期のマルクスの立場は従来マルクス主義においていわれてきたことと違うのではないかと考えています。従来いわれてきたマルクス主義というのは、マルクスのいちばん脂がのっていた時期かもしれませんが、『共産党宣言』から『資本論』へと、つまり経済学批判へと収斂してゆくものです。ただマルクス自身はそのかんも多様な研究をしており、とりわけ1871年のパリ＝コミューンで敗北してから、農民問題や共同体のことをいろいろ考えるようになります。というのは、パリ＝コミューンは農村で小農の賛成を得られなかったことが大きな敗因だったからです。こうして『共産党宣言』で述べられたこととだいぶ異なる

歴史のとらえかたが晩年の10年でマルクスの脳裡に生まれてきます。それがいちばん明確にあらわれているのが、死去2年前の1881年に書いた「ザスーリッチへの手紙」ですね。小農を中心としたロシアの農村共同体・ミールが、資本主義を経ずに共産主義へと前進する可能性があるのではないかというわけです。『共産党宣言』では歴史の必然にしたがって小農はあくまでも没落してゆくとされ、その前提となるのが農業の工業化、つまり農業が大規模化して工業化してゆくことだったのですが、その後『資本論』には、農業の工業化が人間と自然との物質代謝の分裂や大地の劣化というような環境問題を引き起こすとマルクスが感じ始めたことがあらわれています。マルクスが人間と自然との物質代謝を労働の定義に関係づけていることは、椎名重明さんによれば農業への関心が示されています。私も、マルクスが『資本論』を書きながらもその意識をかなり強めていることが窺えると思います。

2018年のラウル・ペック監督の映画「マルクス・エンゲルス」の冒頭には、マルクスを紹介する場面として、山林野の枯れ枝や枯葉を拾い集めている貧農を、馬に乗ってやってきた官憲が追い散らす様子が描かれています。他方エンゲルスは、工場労働者が立ちあがる様子をもって紹介されており、両者が対照をなしていたと思います。

マルクスは若いときに農民のコモンズの問題を書いており、その直後に『経哲草稿』を書いています。あそこで労働に関していわれる自然の疎外は、農民の労働と、のちに労働の中心のようにみられる大工業労働との、二重写しのようなものだと思います。そのあたりがパリ＝コミューン以降に再び出てきて、リービッヒの「人間と自然の物質代謝」の論点とも結びつきます。『経哲草稿』で述べられているのは、私の言葉でいえば〈人間と自然との共生〉に近いものです。エンゲルスには自然の克服、自然の征服のような傾向が強いですが、マルクスの晩年にはそれと異なるニュアンスがあらわれてきます。マルクスがもっとも若いころにもっていた考えが晩年にまた出てくるのです。新

メガからも明らかですが、晩年のマルクスはとくに農学を勉強しています。このことは歴史観についても、封建社会から資本主義へという単線的な変遷でなく、複線的な考え方を提起することになります。

マルクスはエコロジストだといってしまうと誇張になりますが、エコロジー的潜勢力をもっていると私は考えています。この点で私は、アソシエーション研究者の田畑稔さんの依頼を受けて『21世紀のマルクス』に「マルクスの脱近代思想とエコロジー的潜勢力」という論文を寄せたのですが、そこでもマルクスのエコロジー的可能性を見いだせることを強調しました。本来のマルクスにはエコロジストと連帯できる根拠があるのです。この本には、私の問題意識とも重なる論文で、共同体の観点から歴史観を論じた平子友長さんの論文も収められています。ちなみにこの本には、執筆者としてやや異例の組み合わせの顔ぶれが並んでいますが、それも田畑さんの人間的つながりの広さによるものでしょうか。

全国唯研では、やはりもう少しマルクスの哲学や人間観を取りあげてもよいかもしれません。マルクスのとりわけ哲学的なところを研究するのは、人材も豊富な全国唯研の得意とするところだったように思います。総合人間学会でこの課題に取り組むのはなかなか難しいと思います。他方で、AI問題や人新世問題などが現代の大きな話題になり、人間を根源から問うものとして「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」というゴーギャンがタヒチで描いた絵画作品のテーマに多くの人びとが関心をいただくようになってきています。こうして総合人間学会に関心や期待を寄せる方々も増えてきています。

全国唯研と総合人間学会とは重なり合いつつも固有の課題をもって発展してゆくと思っています。私は全国唯研と総合人間学会との相乗効果を期待したいと思います。